

# にんげん図書館 (ヒューマンライブラリー)



生きた本  
一人ひとりにある物語  
様々な生き方が  
そこにある

人生話をひも解く  
社会はそもそも  
多様性に満ちている

にんげん図書館とは  
人を図書館の「本」に見立てて、少  
人数の読者に対話形式で人生話を自  
己開示する対話イベントです。

## 2024.2.3 (土)

時間：13:30～16:00 受付13:15

場所：日野市立中央福祉センター  
(日野本町7-5-23)

参加費無料 となたでも参加できます  
一人2冊まで読めます (聞けます)

定員：40人 (1/15から申込受付)

申込：電話、申込フォーム  
(名前、連絡先、読みたい本の希望)

電話：042-582-2318

申込フォーム→



詳しくはホームページで

🔍 日野市ボランティア・センター ×

### 【本の紹介】

**ウリアナさん**

(ウクライナ避難民としての経験を語る本)

**大高 美和 さん**

(重度心身障害児の施設を立ち上げた、母が語る本)

**佐藤 理佐 さん、山本 麻理 さん**

(小児ガン(神経芽腫)のお子さんをもつお母さんの本)

**木内 晴美 さん**

(PTA会長から教員になった想いを語る本)

**湯口 裕 さん**

(脱サラ後に日野市の市民活動や福祉業界を牽引してきた本)

**中川 ひろみ さん**

(プレイパークでの活動のエネルギーを感じてほしい本)

**仁藤 夏子 さん**

(自分の経験から子ども無料塾につながったことを語る本)

**増島 清人 さん**

(豊田ビールの生まれた背景と、思いを語る本)

**中村 静江 さん**

(満州での戦争体験を語る本)

**齋藤 元気 さん**

(学生ボランティアを支え続ける理由を語る本)

# スケジュール

13:15 受付開始

13:25 注意事項のアナウンス

13:30 開館のあいさつ

13:35 開催趣旨・スケジュール等説明

13:45 1冊目の読書(30分読書・15分間本との対話)

14:40 2冊目の読書(30分読書・15分間本との対話)

15:30 感想交換会

15:50 まとめ

16:00 閉館のあいさつ



## 【お約束】必ずご確認ください。

- ・当日はすべての時間に参加をします。
- ・参加するのは申込み者本人のみです。  
(介助者等の付き添いが必要な場合は別途ご相談ください。)
- ・故意に本および他の参加者を傷つけるような誹謗中傷などの言動はしません。
- ・参加者や関係者のプライバシーを侵害する行為はしません。
- ・精神的苦痛から本が対話継続困難になった場合、本が途中退出または対話中止することに同意します。

## ▼10冊のあらすじ

### ウリアナの祈り：

「戦さから何も生まれません。ウクライナはもとより世界中の国に平和を」

ウクライナの首都キーウで平和に暮らしていたウリアナ。ロシア侵攻が始まったあの日を境に暮らしが一変。命の危機から国外へ避難せざるを得ない状況に。戦乱のウクライナ国境越えから日本までの厳しい道のり、日本にたどり着いてからも数々の困難に直面。観光で外国を訪問するのとは全く違う。家も思い出の品も、愛する人達とも別れ、この日野市に。幸いなことにウリアナの娘であるヤンナが6年前から日本に留学中で日野市に暮らしていた。ウリアナは地域社会と交わる努力を積極的にし、周りの人々もそれに応える形でウリアナを支える。日本語習得のため日本語講座を受講し、沢山の辛い経験をしながらも日本の暮らしに馴染もうと努力しているウリアナの現在の思いが語られる。



ドゥブニコバ  
ウリアナさん

### なければつくればいい

### ～障がいがある娘が教えてくれたこと～

帰り出産のため産院を変えたところ、「検査入院してください」と突然言われ、お腹の赤ちゃんの脳に障がいがあることがわかりました。その2週間後、2010年11月1日1800gの可愛い女の子が生まれます。愛称はめめちゃん。大人がどんなに悩んでいても、いつも笑っているめめちゃんを見て、「目の前を楽しく過ごすこと、幸せになること」を考え始めます。そして、2018年に重症心身障害児及び医療的ケア児を対象とした多機能型児童発達支援・放課後デイサービス事業所”デイケアルームフローラ”を、2022年は”日野坂CANPAS”開設。「どんなに重い障がいがあっても、生まれ育った地域で安心して成長してほしい」と願って前にすすむ母とめめちゃんの、強くて優しい記録です。



大高美和さん

## 何気ない毎日をハッピーに！

### ～小児がんと闘ってきたママの本当の気持ち～

2016年9月2日、同じ日に入院、隣室になった2人の女の子がいました。2人の女の子が宣告された病名は、希少がんと言われる神経芽腫でした。入院した日から同じ病室で過ごす「付き添い入院」となり、その期間は1年間。抗がん剤治療が始まると、免疫が上がるまでは病室どころか、ベッドからも出ることもできない。神経芽腫は、完治がなく治療が終わっても、ずっと病気と向き合う必要があります。2人の女の子のお母さんが「経験したこと」をお話していただきます。現在でも毎年、2000人～2300人が小児がんと宣告されているそうです。「闘病中の子供達に笑顔届けたい。」そのような思いで、日々自分たちにできる活動をしています



佐藤 理佐 さん  
山本 麻理 さん

## 「57才で新規採用の小学校の先生になりました！」

私は、57才で日野市立豊田小学校の新規採用教員となりました。57才の年に新規採用教員研修を修了して、4年目には退職・・・そして今は、再任用教諭として5年生の担任をしています。えっ・・・たった4年で退職なんてと思いますよね！実は、以前に産休代替の教諭として仕事をしていた経験もあるのですが、私は、5人の子供がいて市内の小学校に長いことお世話になりました。その間、PTAの活動にかかわり、会長も務めました。PTAの活動を通してたくさんの子供たちの笑顔に触れ、学校というところはとても素敵なところだなとあらためて感じていました。そんな思いを抱いた頃に校長先生に本気で先生をしてみないかと言われて、教員採用試験を受けました。合格したときは、子供たちの笑顔の中でまた仕事ができることと、まだまだ自分にも出来るという嬉しさがこみ上げたことを、今でもよく思い出します。5人の子どもを育ててくれた学校に、「自分ができる精一杯の感謝と恩返し」と思い日々担任をする子供たちと過ごしています。



木内 晴美 さん

## 動けばチャンスは掴める！！

湯口は31年間の会社生活に終止符を打ち、それまでとは全く違った福祉活動に身を投じた。現役時代は様々な栄光と挫折を経験してきたが、自身の遣りたいことではなく生活の糧としての手段であった。定年を目前にし自分が遣りたいことを模索、結論は福祉に関わる仕事がしたいという信念に基づき、そのための準備を計画的に進めていった。そして立ち上げたのが、ボランティア団体“地域福祉カフェテリア”である。ここで高齢福祉の活動に携わりながら、日野市における市民活動の礎を築いて来られたことは、素晴らしい結果として現在に受け継がれている。新しい活動を模索する中で得た結論は「待っていてはダメ、動けばチャンスは掴める」であった。これからも彼のチャレンジング姿勢は留まることを知らない。



湯口 裕 さん

## 子どもがいるからつながる「人の輪」を広げたい！

子どもが子どもで居られることができる社会をつくりていきたいです。今は「早く社会の役に立つ立派な大人になって」という大人の言う事を聞いて、子どものままで過ごせる時間がどんどん少なくなっている様な気がしています。たっぷりとした「子どもの時間」と「育ちあう仲間」、そして「自由に過ごせる環境」この3つを見守る温かい大人のまなざしの中で、子どもは子どものままで「子ども時代」を過ごすことができるのです。子どもは本来生まれたときから生きる力にあふれた存在なはずです。その子どもを追い込んでいるのは、大人なのです。大人が「子ども時代」を保障しなければならない時代になっていると思います。



中川 ひろみ さん

## 社会への怒りから子どもの居場所づくりへ ～機能不全家族で育った私～

2歳の時に両親が離婚。父親が子どもたちを引取り、父子家庭で育ちました。タクシーの運転手をしていた父は、親としての役目をほとんど果たしておらず、お酒を飲む毎日。それが自分の「当たり前」として育ちましたが、今振り返ると機能不全家族でした。家庭内のトラブルで警察を呼んでも助けてもらえない。「社会から見放された」という怒りを抱いた経験から、家庭だけで子供を育てていくことの難しさを強く感じています。地域の子どもは地域で育てる。そして、家庭環境に左右されず、家庭の経済格差が教育格差にならないようにと無料学習塾「日野すみれ塾」を立ち上げ活動中です。



仁藤 夏子 さん

## 「ビールに興味なかった僕が豊田でビールをつくったわけ」

「ビールっていいコミュニケーションのツールだと思いませんか？」豊田ビールの復刻に奔走した増島清人は、自身が手がけるお店の一角でにこやかに笑いながらそう言った。市が始めたプロジェクトの簡単な手伝いを頼まれたはずが、気づけば先頭に立っていたという。かつて増島少年の心に強烈な印象を残した阪神大震災。被災地支援に力を入れ今に至るまで活動続けるうちにその時感じた「なにか」が徐々に形になり、豊田という彼のホームタウンで花開いていく様子は圧巻。これは、プロジェクトをこけさせてはならない！その一心で走り続け大勢の仲間たちと豊田ビールをクラフトビールの一大ブランドとして育て上げた増島の味わい深い物語である。



増島 清人 さん

## ふるさが消えた日

昭和11年、第二次世界大戦の渦中に満州の吉林省で生まれた中村静江は、終戦を迎えた9歳の時にふるさを失った。終戦後、ソ連軍が中立条約を破り満州に攻め入ったことで立ち退き命令が出され、満州で暮らしていた日本人は故郷を追われ、生きることさえ困難な状況へと追い込まれた。幸運にも家族全員が無事日本へ帰還することができたが、それまでに経験した日々は静江にとって一生忘れることのできない大きな爪痕となった。「生かされてきたものは語り疲れるほどの苦しみ、悲しみを次の世代に伝えることがせめてもの責務かと思い、今日この場でお話させていただきます」ウクライナ侵攻やイスラエル・ガザ戦争など、未だ多くの人々がふるさを失っている現在。戦時・戦後を満州で生きた静江が、日本へ帰還するまでに経験した日々を語り綴る。





中村 静江 さん

## 高校生で3.11を経験した私が 学生ボランティアを支える理由（わけ）

私は高校生の時、地元の宮城県で起きた3.11東日本大震災を経験しました。その時の後悔と悔しさが、私の学生ボランティアを支える原動力です。私は内陸部で被災した一人として、津波や原発事故だけでなく、さまざまな被害や被災者の想いを伝えることが必要だと感じました。しかし、社会が一面的に被災地を見る中で、被災体験の多様性が理解されないことも多くありました。そうした状況の中で私を支えてくれたのは、隣で共に走ってくれた仲間たちです。彼らと一緒に活動する中で、学生でも社会を変えることができると実感できたからこそ、学生ボランティアと一緒に行動しながら支える働き方の面白さに気づきました。今回は、コーディネーターとして学生たちとともに私たちが自分らしく輝ける場所を創り出すことの価値についてお話しします。



齋藤 元気 さん



【本のお部屋】

1冊目

ウリアナさん・・・・・・・・・・ 集会室3  
中川ひろみさん・・・・・・・・・・ 福祉講座講習室  
木内晴美さん・・・・・・・・・・ ミーティングルーム  
齋藤元気さん・・・・・・・・・・ 集会室2  
湯口裕さん・・・・・・・・・・ 健康相談室

2冊目

大高美和さん・・・・・・・・・・ 集会室3  
仁藤夏子さん・・・・・・・・・・ 福祉講座講習室  
中村静江さん・・・・・・・・・・ ミーティングルーム  
佐藤理佐さん、山本麻理さん・・・ 集会室2  
増島清人さん・・・・・・・・・・ 健康相談室

memo

